

か ざ

ぐる ま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2025 冬号

111

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集

大芝遺跡の発掘調査 (縄文時代編)

調査区2 縄文時代の竪穴建物群 (北から)

特集 大芝遺跡の発掘調査（縄文時代編）

縄文時代の遺構の発見

前々号風車109号にて、令和6年度に当文化財センターが実施した大芝遺跡の発掘調査について概要と古代・中世編をお届けしました。今回は古代・中世の遺構面の下に眠っていた縄文時代の遺構・遺物について発掘調査と整理作業を通して明らかになってきた成果をお届けしたいと思います。

もともと大芝遺跡は縄文時代の遺物が散布する埋蔵文化財包蔵地として知られる遺跡です。昭和28年7月18日に発生した和歌山大水害後の復旧工事において水田地下から石鏃や縄文土器が露出したことが遺跡の発見の契機となりました。しかし、ほ場整備事業に先立って行われた確認調査では縄文時代の遺構や遺物が確認されなかったため、調査予定地には縄文時代の遺構面（昔の人々が生活していた地面）は存在しないと推測していました。

大芝遺跡の発掘調査では、工程上調査区を1～4に分けて調査区1から発掘調査を行い

ました（風車109号特集参照）。確認調査の結果どおり、調査区1では明確な縄文時代の遺構・遺物と呼べるものは確認できませんでした。これは中世以降、遺跡西側を流れる日高川が大きく氾濫するたびに田畑を復旧し、周辺の土地の形状を土木工事などによって大きく改変し続けてきた影響と考えられます。ただし、調査範囲の北部にあたる調査区4の北半部や日高川に最も近い調査区1では、そもそも遺構・遺物が少なくなることから、もともと人々の活動が活発ではなかったのかもしれない。

縄文時代の遺構・遺物を最初に確認したのは調査区2の調査中でした。調査区2では、古代末から中世の遺構の発掘作業と並行して現況の里道に沿って、遺構面の下層を確認するための側溝を掘削していました。その際、側溝の土層堆積を確認すると、古代末から中世の遺構面の下に黒褐色の土層と地山（遺物を含まない自然堆積層）を掘り込む遺構があるのが明らかになったのです（写真1）。こ



写真1 調査区2の土層断面

の黒褐色の土層及び地山を掘り込む遺構からは中世の遺物は出土せず、縄文時代の土器や石器が多数出土したことから、縄文時代の遺構であると考えました。その後の調査で、確認した黒褐色の土層は縄文時代の人々が建てた竪穴建物の埋土であったことが判明しました。

このため、当初の調査内容を一部変更し、縄文時代の遺構が残る範囲を追加で調査することとなりました。追加調査の結果、縄文時代の遺構が残るのは調査区2と調査区4・2



図1 調査区2及び4-2で確認した縄文時代の遺構配置図

区の南半部の一部であることが明らかになりました(図1)。

明らかに集落の姿

縄文時代の人々は、地面を掘り下げて地表面より低い位置に床面を作り、柱を立てて屋根をかける竪穴建物で生活していたと考えられています。大芝遺跡では、縄文時代の遺構面で竪穴建物、もしくはその可能性が高い遺構を現在21棟確認しています(写真3)。これは、現在県内で発掘された縄文時代の集落の建物跡の数としては最多です。ただし、竪穴建物は重なり合っている状況で確認しており、21棟が同時に建てられていたわけではないようです。これらの竪穴建物の平面は不整形な円・楕円形をしており、直径5m程度のものが多くみられます。竪穴建物の埋土を全て掘削してみると、床面からは被熱した土や炭化物を含む炉(写真2)や建物を支える柱穴とみられる小穴を複数確認しました。

大芝遺跡の竪穴建物は遺跡西側を流れる日高川に沿って概ね南北方向に建てられていたことが明らかになりました。また、竪穴建物の埋土から出土する土器の年代から、縄文時代後期前葉末から中葉頃(約4,000年

前)3,800年前)に集中して建てられていたと考えられます。

同じ日高郡内で発掘調査された徳蔵地区遺跡(みなべ町)では、縄文時代中期の竪穴建物が14棟確認されました。また、後期前葉の土器棺墓などが発掘調査で明らかになっており、祭祀や埋葬に関わるような遺構も確認されています。しかし、今回の大芝遺跡ではそういった遺構は確認されていないことも、発掘調査で明らかになった大芝遺跡の一つの特徴と言えるでしょう。

縄文時代の人々の生活と交流

縄文時代の人々は、土器を使って食べ物を煮炊きし、石器などを使って狩猟採集を行う生活を行っていたと考えられています。大芝遺跡からも多数の土器や石器が出土しています。出土



写真3 調査区2 竪穴建物完掘状況(東から)

した石器は大きく打製石器や磨製石器、礫石器などに分かれ、打製石器は石材を割って製作したもので、狩猟で使った弓矢の鏃（石鏃）が最も多く確認されており（写真4）、他にも石錐や削器などがあります。磨製石器には伐採や土掘りなどに使用した石斧や、礫石器には木の実などを加工する叩き石や石皿、魚を捕るための網の重りである石錘などが出土しています。

出土遺物の整理作業を続ける中で、大芝遺跡で出土した打製石器の大半はサヌカイトと呼ばれる石材で製作されていることが明らかになりました。この石材は和歌山県内ではほとんど産出せず、二上山（大阪府と奈良県の県境）か金山（香川県）が有名な産地になります。大芝遺跡から二上山まで直線距離で約

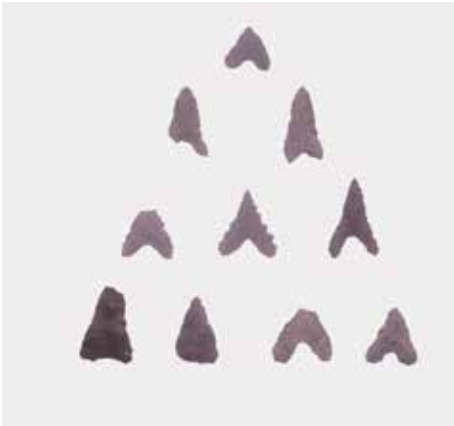


写真4 様々な形の石鏃

75 km、金山までは海を挟んで約140 kmもあります。サヌカイトだけではありません。いわゆる蛇紋岩と呼ばれる石材で作られた磨製石斧（写真5）は、その形状から北陸地方で製作され、大芝遺跡に運ばれてきたものの可能性があります。

また、土器を見ると、地元で製作された縄文土器（写真6）以外に、関東地方の影響を強く受けたものや東海地方で製作されたもの（写真7）が確認できました。土器だけが移動することは縄文時代では想定できず、大芝遺跡で生活していた人々が関東や東海、北陸地方といった様々な地域の人々と直接・間接的に交流していたと考えられます。

縄文時代の日本列島には馬などの長距離移動に適した動物もおらず、移動手段は徒歩や丸木舟などに限られていました。大芝遺跡から出土した土器や石器を観察することで、現在の私達からは想像もつかないような距離を縄文時代の人々が移動し、交流していたという姿の一端が明らかになってきました。今後、出土遺物の整理が続く予定となっており、更に詳細な縄文時代の人々の姿が明らかになると考えています。

（濱崎 範子）



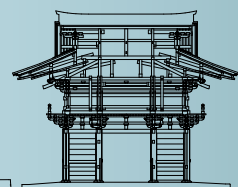
写真5 蛇紋岩製磨製石斧



写真6 地元で作られた縄文土器



写真7 東海地方北部で作られた縄文土器



県指定文化財 力侍神社本殿・ 摂社八王子神社本殿の保存修理

力侍神社のある和歌山市川辺は、市の東端、紀ノ川北岸の平野部に位置しています。まっすぐな参道と、社殿を取り囲む木々に包まれた境内は、鎮守の森にふさわしい景観を創っており、鳥のさえずりや蝉の鳴き声が絶えません。

力侍神社の由来は明らかではありませんが、天手力男命を祭神として神波村に鎮座し、上野村に鎮座していた八王子神社の境内に力侍神社が遷され、寛永3年（1626）に両社そろって現在の川辺の地に遷座されたといわれています。

社殿は向って左に力侍神社本殿、同右に摂



修理前の力侍神社本殿（手前）と
八王子神社本殿



葺き替えが終わった柿葺の屋根



力侍神社本殿の小屋裏に保存されていた柿の断片

社八王子神社本殿が並んで南面して建てられています。棟札などから、力侍神社本殿が寛永11年（1634）、摂社八王子神社本殿が寛永元年（1624）の建立であることがわかります。両社殿とも一間社流造、柿葺の建物で、摂社の八王子社の方が寸法的には一回り大きいですが、様式的にはほとんど同一です。

力侍神社本殿・摂社八王子神社本殿ともに平成7年度から9年度に解体修理工事が行われました。この時の修理で、屋根が檜皮葺から柿葺に復原され、彩色も痕跡から復原整備が行われました。

前回の修理から約30年が経過し、柿葺屋根は劣化が進んで雨漏りがみられるようになり、彩色や塗装にも剥離や剥落がみられるようになっていました。そのため、令和6年度

から7年度の2カ年で屋根葺替・塗装修理・部分修理を実施しました。

修理中に力侍神社本殿と摂社八王子神社本殿について疑問に思っていたことを記します。

① 文献では2殿そろって遷座されたと思いますが、両殿の棟札の年代と若干食い違っており、社殿は別々にこの地に建立されているようです。

② 摂社である八王子神社本殿が10年早く建立され、境内の長い参道の中軸線上に建てられているのは、八王子神社を中心に境内が計画されたからでしょうか。また、なぜ力侍神社本殿より一回り大きく、本社が摂社の脇にあるのでしょうか。

③ 「春日造」形式が多い紀州、特に紀の川筋において、一間社の「流造」形式の社殿を2棟並べて建てているのはここだけです。なぜ独特の形式が用いられたのでしょうか。

④ 県内の指定文化財で柿葺の建物は、ほかには青岸渡寺本堂（重文）、広八幡神社舞殿（県指定）のみです。なぜ力侍神社が柿葺なのでしょう。

修理の最中にこの様なことを考えていましたが、結局答えは導き出せませんでした。皆さんは「力侍神社の謎」についてどう考えますか。

（寺本 就一）

文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物(10)

高野山奥之院の参道入口にあたる一の橋から弘法大師御廟方面にしばらく進むと、右手に「永田秀次郎墓所」・「関東大震災供養塔」の敷地があり、供養塔（大正一四年建立）の奥には方三間、宝形造の霊牌堂が並び建ちます。

永田秀次郎氏は、大正一二年の震災当時に東京市長を務めていた人物であり、墓所に設置された「高野山震災霊牌堂建立願文」には、霊牌堂建立に至るまでの経緯や震災犠牲者の名簿の作製方法等について、願主である永田氏によって詳細に記されています。その文中では、名簿の埋蔵方法について、「永久的な保存を目的として、当初は地下深くに埋蔵する計画であったが、武田五一氏の意見に従って霊牌堂を建立するに至った」との内容を読み取ることができます。

武田五一氏は、近代日本を代表する建築家であり、京都帝国大学（現在の京都大学）工学部建築学科の創設に尽力されたほか、鹿苑寺金閣や平等院鳳凰堂、法隆寺といった古社寺の保存修理にも携わっています。高野山内においては、高野山大学図書館（昭和四年）のほか、壇上伽藍の中心に建つ金堂（昭和七年）・根本大塔（昭和一二一年）の設計を担当されています。特に、金堂と根本大塔は天沼俊一氏（105号にて紹介）と共同で設計された建物であり、昨年には国の重要文化財に指定されました。



高野山奥之院 関東大震災供養塔
写真左より霊牌堂、供養塔、永田氏墓所が並び建つ。

永田氏は武田氏の意見を採用し、耐火や耐震に優れた鉄筋コンクリート造の霊牌堂を昭和五年に建立されました。犠牲者の冥福を祈るために、私財を投じて尽力された永田氏の志に感銘を受けた次第です。

（野田 達志）

きのくに歴史小話

～きのくににれきしこぼなし～

埋蔵文化財課

大昔の和歌山県人は
タコを食べていなかったのか？



和田岩坪遺跡出土のマダコ壺

弥生時代中期～古墳時代前期に大阪湾岸の大阪府から兵庫県にかけての遺跡から、縄を通す穴があるコップ形をした土製のイイダコ壺が多量に出土しています。また、イイダコ壺より大きく、口縁部に縄を通す穴や縄を結ぶ痕跡があるガラス形のマダコ壺も一定量出土しています。タコは、魚類のように骨が出土しないので、タコ漁に用いられるタコ壺の出土がタコを食用としていた間接証拠になります。しかし大阪府や兵庫県と違い、和歌山県内では当該期のタコ壺はごく数点しか出土していません。では、和歌山県の沿岸部ではタコがいなかったのかといえば、現在でも加太や友ヶ島周辺ではタコ漁を続けられており、当時タコがいなかったとは考えられません。確かに現在日本に輸入されるタコの大半を占める西アフリカのモーリタニアではデビルフィッシュと呼ばれる食用には敬遠される地域もあり、それと同じように当時の和歌山県人はタコを食べていなかった、という結論に近づいていきますが、果たしてそうだったのでしょうか。令和4年度に発掘調査した和田岩坪遺跡（和歌山市）からマダコ壺と考えられる土器が3個体出土しました。うち1点は底部に引き上げる際に水を抜く穴があげられています。和田岩坪遺跡では、網漁に使用する土錘が多量に出土することから漁をしていた集団であると考えられ、少ないながらもタコ壺漁もしていたと想定されます。タコ壺は破片では普通の土器とは区別がつかない可能性もあり、県内の過去の出土品を探せばもっとタコ壺が含まれているかもしれません。また、タコ壺が少ないのは、釣り針を使用するなど別の方法で漁をしていた可能性もあります。目の前の海にいる貴重なタンパク源をみすみす見過ごすことはあるでしょうか？

（仲原 知之）

参考文献 瀬谷今日子2013「和歌山県出土のイイダコ壺」『紀伊風土記の丘研究紀要』第2号

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報(2025年冬～2026年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 学芸員講座⑤「高野6」 2026年1月11日(日)
- 学芸員講座⑥「岩橋千塚29」 2026年1月18日(日)
- 古墳ガイドツアー② 2026年1月25日(日)
- 館長講座⑤ 2026年1月31日(土)
- ボランティアが語る紀伊風土記の丘の魅力講座 2026年2月1日(日)
- 展示講座④(冬期特別展) 2026年2月8日(日)
- 冬期特別展「シンポジウム」 2026年2月22日(日)
- 古墳公開 2026年3月1日(日)
- 館長講座⑥ 2026年3月21日(土)

和歌山市立博物館

- 企画展「歴史を語る道具たち」 2026年1月7日(水)～2026年3月8日(日)

かつらぎ町歴史民俗資料館

- 記念講演会「祭祀遺跡研究の今—祭祀遺物、継承と断絶の視点から—」 2026年2月21日(土)

※掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙
- 2 特集「大芝遺跡の発掘調査(縄文時代編)」
- 6 短信「県指定文化財侍神社本殿・摂社八王子神社本殿の保存修理」
- 7 きのかに歴史小話「文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物(10)」
「埋蔵文化財課 大昔の和歌山県人はタコを食べていなかったのか？」
- 8 催し物案内

風車111 (2025・冬号)

令和7年12月26日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp



ホームページ



YouTube



WABUNSE_OFFICIAL
Instagram